

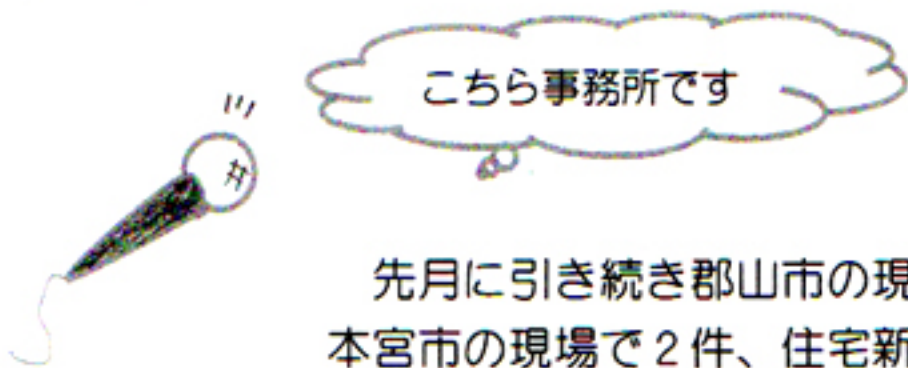
ねじりはちまき

9月 長月 白露 秋分の月となりました。
9月1日、防災の日と二百十日です。8日 白露。13日 中秋の名月十五夜です。23日 秋分の日でお墓参りですね。

そろそろ秋祭りが近付いて来ました。
お祭りは地域の鎮守様にその年の収穫を感謝する行事で、祭りが終われば田の神様は人里から遠く離れた山に帰り、山の神となります。
冬の間は、人里には田の神はいなくなりますが、再び春が来て種まきの時期に田の神を呼び戻すために、春祭りが行われます。
祭りの時は神様も人も一緒に飲んだり食べたり、賑やかにします。
そこで、神様を楽しませようと音楽や踊りを披露するようになり、それが芸能として発展して、神楽や猿楽や能などが生まれたといわれています。

食欲の秋とて、油断して飲み過ぎ食べ過ぎにご注意下さい。

幸田 常一



先月に引き続き郡山市の現場で1件、二本松市の現場で1件、本宮市の現場で2件、住宅新築工事をお世話になっております。

お知らせ

9/23(月)「秋分の日」はお休みさせていただきます。

<会社近況>

9月に入りました。朝晩だいぶ涼しくなり、過ごしやすくなってきましたね。季節の変わり目ですので、お体大切にしてください。

暑さもひと段落し、作業もしやすくなって来ました。
この夏はむぎ茶の他に、塩分入りの清涼飲料水をかなり飲みました。
現場で作業する社員たちも、各々体調管理には気を付けてくれていました。
お陰様で熱中症になることもなく、何とか乗り切ることができほっとしています。
この秋は住宅内覧会を予定しております。
来月号でご案内できるかなと思いますので、よろしくお願いいたします。

おいしい♥9月

「梨」

秋の果物が出回り始めましたね。!(^^)!
今月は「梨」です。梨には食物繊維が含まれているのと、カリウムも含まれています。カリウムは体内の余分な塩分を排出してくれます。
また、咳止めや解熱効果もあるようなので、風邪をひいたときなど食べるとよいですね。

きぬかつぎ
衣かつぎ

里芋を皮付きのまま蒸したものです。半ば皮をかぶっている様子が、衣をまとっているように見えることからこう呼ばれています。皮の回りに包丁で筋目を入れて蒸して、軽くつまむと皮がつるりとむけます。塩をふって食べても十分おいしいです。

令和元年9月5日発行
有限会社 幸田建設
<発行責任者>幸田久美
〒969-1204
本宮市糠沢字八幡1-1
電話、0243-44-3816

<後記>
4才の孫は外遊びが大好き。
いつの間にか自転車に乗れるようになっていました。えっ、この前は三輪車に乗っていたよね?成長の早さに驚くばかりです。(事務員k)

この度、田中 修著の「植物はすごい・七不思議篇」という本を手に入れたので、植物の生きるうえでの“すごさ”について印象に残ったところを少々紹介したい。何でこれを取り上げるかと言うと、我々人間は植物を自分より下等な存在と見がちで、植物の持っている生きるうえでの知恵・仕組みを余り知っていないことが多いと思うからである。今の季節まだトウモロコシやトマトが旬のものと言えらると思うので、この二つをとりあげたい。

先ずトウモロコシについて。トウモロコシはイネ科に属し、世界の「三大穀物の一つ」である。その外の二つ植物は、ご承知の通りイネとコムギである。トウモロコシが世界の三大穀物の一つとして世界の食糧を賄っていると言われると、日本人にとっては意外に思われるかも知れない。日本では、穀物と言えばイネやコムギであり、トウモロコシは、「スイートコーン」といわれるように野菜として扱われている。そう言われてみれば、国によって違うものだと思う。トウモロコシの原産地は南米のアンデス山脈の山麓で、日本に伝わったのは南蛮貿易が始まった16世紀後半のようである。

それでは、トウモロコシの不思議に入ろう。その一つは「ふさふさの毛は何か」である。実は毛を先から基部へたどっていくと、そこに一粒の実があるのだ。トウモロコシはまっすぐに伸びた茎の先端に咲く花が雄花で、茎の中ほどの葉っぱの付け根に穂のような状態で咲くのが雌花である。この雌花の穂状に見えているのは、細く長い毛（絹糸）がフサフサとしている。つまり、一つの絹糸の柱頭に一つのメシベがあり、受粉して実をつけるというわけである。毛の数が多きほど（うまく実を付ければ）、毛の本数だけ実をつくることになるのが、トウモロコシなのである。ところが、トウモロコシの雄花にも雌花にもハチやチョウを誘い込むためのきれいな花びらはない。実はトウモロコシは虫に花粉を運んでもらう植物ではなく、花粉の移動を風に託す植物で、「風媒花」といわれている。

不思議の二つ目は「なぜ、家庭菜園では歯抜けになるのか」である。家庭菜園でトウモロコシを栽培すると、実がびっしりと詰まらず、歯抜け状態のものができることが多い。これは、栽培が下手だからだろうか。でも別の理由があるのだろうか。トウモロコシは前に触れたように、雄花と雌花が離れて花を咲かせる。それに加えて、雄花と雌花の成熟する時期がずれているのである。そこに答えのヒントがある。実は雄花が先に熟して花粉をまき散らす時、雌花はまだ成熟していないのである。したがって、同じ株での雄花・雌花の受粉はなされないというわけである。それでは困ると思うが、どうか。そこでトウモロコシはどうしているかと言うと、他の株との関係でそれを成し遂げている。つまりある株の雌花は、風に運ばれてきた他の株の雄花の花粉を受粉するのである。したがって、株の数が少なければ受粉のチャンスがそれだけ少ないことになる。家庭菜園は小規模で、植える本数は少ないので、どうしても実が歯抜けの状態になりやすいという次第である。

不思議の三つ目は、「なぜ、黄色の粒と白色の粒が混じっているのか」である。普通はトウモロコシの粒の色は黄色一色とか白一色で、それぞれの粒の色を作る系統がある。代を重ねても同様である。ところで、黄色の粒をつくる系統と白色の粒をつくる系統を両親として子供をつくとどうなるか。この時、子どもには黄色の粒のみがつくられるのである。

（この場合は一方の親のみの色が現れるのである。つまり、色が現れる方を優性といい、現れない方を劣性という。）そして、この子どもの黄色の粒を播いて栽培したらどうなるか。今度は、劣性で隠されていた一方の親の色も現れるのである。つまり、白色の粒もつくられる。その現れ方、黄色の粒と白色の粒のつくられる比率は3：1になっているという。

（これは遺伝の法則で決まっている）。

またもうひとつ。黄色い粒をつける品種と白色の粒をつける品種を近くで栽培すると、白色の粒をつける品種の株に、多くの黄色の粒が混じる。黄色の粒ができるというのは、優

性の形質であるから、白色の粒をつくるはずの雌花に黄色の粒をつくらせたということである。このことは、粒の色ばかりでなく、味にもでてくる。味が変化することもあるので要注意である。つまり、甘い品種の雌花に少し甘味の劣る品種の花粉が付くと甘味が落ちてしまう。特に飼料用品種が近くで栽培されている場合は危ないといえる。

不思議の四つ目は、「どうして、アルコールができるの？」である。実は、食糧であるトウモロコシから燃料として使われるエタノール（アルコールの一種）がつくり出される。このエタノールをガソリンに混ぜて燃料として使われる。これは、唐突なことではない。ウイスキーの原料をみれば分かる。ウイスキーの原料は、オオムギやコムギのみではなく、トウモロコシからもおいしいウイスキーが作られる。トウモロコシにはアルコールが含まれているからである。また、燃料の話に戻るが、トウモロコシから作り出されるエタノールは「バイオエタノール」といわれ、環境にやさしい燃料である。バイオエタノールを燃焼させて二酸化炭素を排出しても、大気との二酸化炭素のやり取りはプラスマイナスゼロとなり、大気中の二酸化炭素の濃度は上昇しないのである。化石燃料とは違うのだ。

最後の不思議は、植物にとって耐えねばならない3K（強光・高温・乾燥）に関連する話だ。これらの三つの悪条件を備えた「三K」地帯に暮らせる植物は「C4植物」といわれる。その代表的植物がトウモロコシである。では「三K」に耐えるためには、どんな性質をもっていればいいのか。それは、「PEPカルボキシラーゼ」という特別の酵素をもっているからだという。この酵素をもっていると、二酸化炭素の濃度が低くなっても、ごくわずかの二酸化炭素でも効率よく取り込み、光合成が続けられるというわけである。これに対して、C4以外の植物にとって、照り付ける太陽の光で光合成がどんどん行われると、やがて二酸化炭素が不足し、葉っぱにあたるすべての光を使いこなすことができなくなる。トウモロコシのようなC4は、二酸化炭素の不足が生ぜず、光を無駄にすることもない。従って、高温のもとでも光合成が活発に行われ、「高温」にも強いということになるわけである。また、トウモロコシは水を節約し、乾燥にも強いのである。植物の水の消費量は、植物の乾燥重量を1グラム増やすのに使われる水の量で表すそうだが、その比較でいうと、C4植物はそれ以外の植物と比べて約半分の量というわけである。なぜ水を節約できるのか。それは、二酸化炭素を効率よく取り込むPEPカルボキシラーゼのおかげで、気孔を大きく開けずに、空気中の二酸化炭素をすみやかに体内に取り込むことができるので、気孔から水が出ていく蒸散という現象で失われる水の量が節約できるというわけである。

次に「トマト」の不思議の話に移りたいが、余白が少なくなったので一つだけ紹介したい。それは「トマトは野菜か、果物か」である。皆さんはどう思うだろうか。例えば、トマトの果汁は、「野菜ジュース」に入っているが、トマトジュースには「果汁」と書いてある。国語的に言えば、「果汁」は「果物の汁」である。そこで、トマトは「野菜と果物のいずれか」という疑問が起こる。実はこれをめぐって、19末アメリカで裁判が行われたのである。どんな裁判か。当時のアメリカでは、野菜の輸入には関税がかけられ、果物なら関税がかからなかった。そこで、役人はトマトを野菜として関税をかけようとし、輸入業者は果物として関税を免れようとした。裁判の結果は「トマトは野菜である」となった。その判決理由は「トマトは果樹園でなく、野菜畑で育てられる」からであるとした。また、補足として「トマトは食後のデザートにならない」と判示したのである。いかがでしょうか。

裏那須 流石山・大倉山・三倉山

【今回登った山の概要】(◎は日本二百名山、○は日本三百名山)

- ・流石山 (ながれいしやま 1812.5m)
- ・大倉山 (おおくらやま 1885m)
- ・三倉山 (みくらやま 1888m)
- ・三倉山・大倉山は会津百名山(*)に選ばれている。

(*) 1996～1997年度に福島県会津保健所と南会津保健所の健康増進事業として「会津百名山リストアップ委員会」により選定された山。

お盆が過ぎてからも、いろいろな用務と天候と畑作業の関係で、なかなか山に行けなかった。9月6～7日の用務が終わり、一方、強い台風15号が接近しつつあるとのことから、8日(日)がチャンスと思い、ダメ元で山に行くことにした。

今回は、日帰りの日程しか取れないので、花と紅葉の季節ではないが久しぶりに、裏那須(*)の、流石山・大倉山・三倉山に行くことにした。

(*) 裏那須(うらなす)とは、表那須(おもてなす)＝那須岳(日本百名山)(那須連峰・茶臼岳・朝日岳・三本鎗岳1917mなど)に対し、その西側に位置し、表と比べると標高が少し低く、かつてはアプローチが容易でなかったためか注目度が低かったが、裏那須は知る人ぞ知る良い山(連峰)で自分の好きな山。これまで3回登っている。梅雨の時期のニッコウキスゲなどの花と秋の紅葉の頃が登山適期か。

8日5時過ぎ、妻からおにぎりを貰って出発。空はどんよりとしていて今にも雨が降ってきそうな空模様。雨になったら登らずに登山口を確認するだけでも良いと思った。

白河ICから甲子トンネル経由で下郷町の旧会津中街道(*)大峠を目指す。甲子トンネルを抜けると南会津地方は青空が広がっていた。

逆に心配なのは車の燃料になってきた。忙しさにかまけて燃料の補給を忘れていた。スタンドまではおそらく20km以上あり、日曜日のこの時間に開いている店は皆無だろう。まだ黄色のランプは点いていなかったのに登山口まで行くことにした。観音沼森林公園を経て日暮の滝の先から未舗装の悪路になり、慎重に進んだが1回車の腹を擦ってしまった。

6時半過ぎ駐車場着、黄色のランプはまだ点かない。15台位おける駐車場に

は会津と新潟ナンバーの車が駐まっていた。山には誰もいないことを想定していたので少し安心する。

(*) 会津中街道：江戸時代に会津西街道の代替街道として整備された街道。1683年（天和3年）の日光大地震により鬼怒川支流の男鹿川が土砂でせき止められ、五十里湖ができ会津西街道が水没し通行不能となったため、1695年（元禄8年）に整備された新たな街道。その後会津西街道が再整備されたため、次第に使われなくなった。参勤交代にも使われた。（ウィキペディア）

装備を整え7時出発、樹林の間から見える周囲は晴れているが目指す方向の山の上部は雲に覆われている。10分で林道終点に着く。

旧中街道の3m幅くらいの石畳だった道は凸凹で荒れているが参勤交代にも使われた往時を偲ぶことができる。

鏡沼への分岐を経て、7:50 樹林帯を抜けて大峠（標高1450m）に着く。峠は開けていて振り返ると姿の良い山が真っ青の空の下に見える。観音山だろう。左手前方には表那須の連山が流れる雲の間から時折姿を現す。三本鎗岳が近くに見えた。分かりやすい山道の十字路には、新しい標識が立っていた。直進して下ると三斗小屋温泉、左に行くと那須連峰最高峰三本鎗岳、右方向の流石山を目指す。背の高い樹木はなく膝くらいまでの笹に覆われたジグザクの道を登る。左側からまともに当たる風が段々強くなってきた。

登って行くと帽子が飛ばされそうな強い風に乗ってガス（霧）が流れてきたので、カッパの上着を着けフードを被りザックにカバーをする。カバーは風を孕んでバタバタと音を立てるほどだ。

“引き返すにはまだ早い、せめて流石山までは” と思い、頑張る。短い時間だったがパラパラと雨粒になってきた。足下の笹のツユで靴が濡れて靴下まで染みこんで来た。そろそろ買い替え時か。

慰めは、盛りはとうに過ぎたとはいえ花がまだ残っていた。リンドウの花が咲いていたことだ。

小さめの赤っぽい紫色のハクサンフウロ、真ん中が黄色で白い花の先が丸い5つの花弁の花はチングルマの残りか。ミネウスユキソウもあった。

稜線に達し、なだらかになった道を登っていくと9:05 標識のある流石山山頂着。風よけになっている低木に囲まれた10平方メートル位の狭い山頂には40才代くらいの男性の先客が腰を下ろしていた。地元会津の人で、風が強いので先に行くかどうか迷っているとのこと。駐車場を5:30に出発したが、途中で風よけの岩の陰で休んだら1時間くらい眠ってしまったとのこと。いろんな人がいるものだ。

二人で行くと怖くないから一緒に行きませんかと誘ったが、その人は自信がないからもう少し様子を見るとのこと。

9:20 大倉山に向けて出発する。流石山は1813m、大倉山は1885m、三倉山は1888mなので、もちろんピークがありアップダウンはあるが緩やかで、笹を主体とした草原の気持ちよい縦走路だ。飯豊連峰の縦走路に似ていると言う人もいる。自分は昨年11月に登った四国の三嶺(◎みうね1894m)に似ていると思った。ただ今回は強い風と流れる霧でゆっくりと楽しむことはできない。

しばらく行くと、トレラン専用の装備を身につけ日に焼けた男3人女2人の若者のグループが立ち止まって水を飲んでいて話したら茨城の人たちで、2週間後に行われるトレランの大会(*)に出るので下見に来たとのこと。麓の音金登山口から登り三山を文字通り縦走し(私とは逆のコース)大峠に下り、走って音金登山口に戻るとのこと。

(*) トレランの大会名称：会津-那須越県ロングトレイル2019

①9/21(土)20:00~22(日)20:00 ②スタート大内宿、ゴール板室温泉 ③距離95km ④参加定員300名 ⑤エントリー費25,000円 ⑥参加条件：湯野上温泉、大内宿、板室温泉のいずれかに前泊、後泊として1泊すること (ホームページ)

調べてみて改めて驚く。このような山岳のロングトレイル大会が全国や海外でもいくつかあるようだ。

10:13 大倉山頂着。周りを背丈くらいの笹や、シャクナゲ、ツツジなどに囲まれて風よけになっている。休憩し水分とエネルギーを補給する。

10:25 発。しばらく行くと今度は後方から単独のトレラン女性がやって来て追い越して行った。宇都宮の人でやはり大会参加の下見とのこと。年の頃は20代後半か30代前半ぐらいか。茶臼岳の麓の峠の茶屋から表那須を縦走してきて大峠に下り流石山に登って三倉山まで行って引き返すとのこと。すごいことだ。

三倉山頂の手前でまた会って、ケガをしないようにと声をかけると、ありがとうございますと返答があり颯爽と下って行った。

11:05 三倉山頂着、誰もいない。スタートしてから4時間かかった。前に自分が登った時はなかった立派な新しい白御影石の標柱が立っていた。裏側に「平成20年7月吉日 三倉山山開き実行委員会」と彫られていた。

前方の北側が晴れていて下郷町の麓の集落や色づき始めた田んぼの様子が見える。南側は流れの早い白いボリュームのある雲に覆われて表那須の連山は見えない。近づく台風15号の影響なのだろう。

食事をしていると男性登山者が登ってきた。水戸の人で、駐車場から3時間で来たとのこと。昭和35年生まれとのこと。くるぶしまで覆わないスニーカー

のような軽登山靴だった。自分の靴は冬でも履ける重いもので、軽い靴もあれば良いと思った。次の課題だ。

二人で北側の山を同定してみた。遠く長い稜線の飯豊連峰が分かった。右手奥に布引高原の風力発電の風車を認めることができた。磐梯山も見えるはずだが分からなかった。すぐ近く東側の立派な山は観音山(1640m)で、登高意欲がかき立てられるが登山道はないとのこと。

またまたトレラン姿の男性3人女性1人のグループが登ってきた。大会の下見ですかと聞いたら、大会には出ないが、ここの流石山・大倉山・三倉山の稜線を走るのが好きで時々来ているとのこと。今日は計10人のトレイルランナーと出会ったことになる。

彼らが出発した後12時下山開始。12:25大倉山、少し休む。下って行くと小さな池があり五葉の泉らしい。標示板は朽ちていた。泉のすぐ下にリンドウの花が群生していた。

遮るもののない稜線でも、ところによって風の強さが異なる。周囲の山々の配置や地形のせいで風の通り道などもあるのだろう。きつく締めた帽子が飛ばされそうな程風が強くなり流れるガスで湿気る。ザックカバーが音を立てる。

13:20 流石山。

14:10 大峠着。青と赤の手ぬぐいでほっかぶりした男と女の石の地藏さんが手を合わせて優しく微笑んで出迎えてくれた。

標高が低くなり、樹林帯の中に入ると稜線上の風が嘘のようだ。湿っぽい旧石畳の途中で生臭い獣の臭いがした。気持ちの良いものではない。15時過ぎ駐車場着。休憩を含み8時間の山行を無事終わる。

車の燃料を気にしながら日暮の滝(*)を見て下ると、いよいよ黄色のランプが点灯した。白河ICまでは登りと距離があり、燃料が持たないと判断したので、距離の近い、下る一方の下郷町に出て会津若松経由で帰宅することにした。小さな町では日曜日はスタンドの休みのところがほとんどだ。ひやひやしながら開いている店を見つけ、無事給油し帰宅する。

(*) 日暮の滝：観音沼森林公園から大峠へ続く道の途中にある。会津でも見事な滝といわれ「日が暮れるまで一日中眺めていても飽きることがない」というところからこの名が付けられた。秋の紅葉シーズンは特に見事な景観です。(下郷町ホームページ)

令和元年9月 NO83 アンチ・エイジング 山旅遊人